

土地利用型	水田率%	桑園率
A	50以上	
B	40~50	0~20
C	40~50	20~30
D	30~40	10~20
E	30~40	20~40
F	20~30	0~20
G	20~30	20~30
H	0~20	0~20
I	0~20	20~40

II 中山盆地地形区では、盆地内に丘陵地や段丘面が点在するので水田率は低く、又、タバコ栽培が盛んで、養蚕と共存していくこともあり、桑園率も低いF型を示している。

IV 山地性丘陵地地形区では、凹地が水田として僅かに利用され、斜面は畑や桑園として利用されているので、水田率・桑園率がほぼ同率を占めるG型となっている。

V 火山山麓やIV山地地形区にある開拓地は、戦後まで広大な公有の未利用地が残っており、又、水利も悪いので主畜農業を行なう農家が多く、牧草畑、飼料用作物畑などが大きな割合を占めるため、水田率・桑園率ともに低いH型を示している。

以上のように、地形区と土地利用型が非常によく一致することが判明した。これらを決定する因子としては、地形の傾斜の大小、広い平坦面の有無、水利の良悪、1戸当り耕地面積の大小、経営主体が耕種であるか養蚕（養蚕も含む）であるかなどが考えられる。

深雪地飯山市の地理学的考察

内 田 美 枝 子

本論文は、長野県飯山市をフィールドとして、本市での積雪の分布、土地利用と農業生産、人口減少の実態を中心に調査し、その間に見られる関連性を考察することを目的とした。論文構成は次の通りである。

序 第一章 飯山市概観 第二章 自然条件 人口減少の実態 第四章 農業 第五章 積雪 — 農業生産性 — 人口減少の関連について

要約 おわりに

要約

1 長野県飯山市は、新潟の豪雪地帯に続く豪雪地であり、多い所では3mを越す積雪があり、南隣りの中野市とも1m以上の違いがある。市域内でも積雪の量が違い、北部の岡山、太田などに行く程多くなり、積雪期間も長く、東西では西の関田山脈に近づく程多くなっている。気温は逆に盆地底程寒冷になっていて、北部の峡谷に入るとかえって寒気はゆるくなる。

2. 本市は、長野県17市の中でも、人口減少率がトップ（S40～45で-7.6%）で、同じ様な歴史をもつ中野市が増加の傾向にあるのに比較して対照的である。市域内では盆地底の飯山、木島などが人口密度も高く減少も小さいが、岡山、富倉、外様、太田などでは減少率が大きい。昭和25年までは徐々に増大していた本市の人口は、25年を契機にして急激な減少に変わり現在も続いており、年令別では幼年人口の激減と老年人口の増大、産業別では第一次産業（主に農業）の減少となって現われている。富倉や岡山、太田では自然減少も起きている。
3. 本市では就業人口の大半が農業に従事しており、農家率も63.3%と非常に高い。兼業化が進み、その中でも兼業を主とする農家になり、それとともに出かせぎなどの割合が他市よりずっと多くなっている。
4. 農業の中心は水稲であり、県と比較しても水田率は非常に高く、裏日本の積雪単作地帯の南限となっている。二毛作は全然行われておらず、また果樹の多い北信に属しながらも果樹の割合が非常に低くなっている。市域内では北部に行く程、水田率が高く果樹の割合は低くなっている。
5. 本市の農業は農家の努力のために、水稲の反別収量はいいが、積雪などの影響を受けて作物の回転が少く、土地生産性、労働生産性ともに低くなっており、農家一戸当りの所得も低い。特に中野市と比較して所得の差が大きいのは果樹の割合が大きく違うことと結びつくものと思われる。
6. 結局、農業面から見ると、積雪が多くて水稲のみに頼らざるを得ない地域ほど人口減少率も高くなっていると言える。そのことは同時に果樹や桑などの換金作物が積雪が多くなるほど少なくなっていることから考えられる。最深積雪量、人口減少率、水田率、果樹園率、桑園率などを地区別に大きい（小さい）順に並べた結果、比較的似たような配列を示すことがわかった。その配列は以下に示した通りである。

最深積雪量（大一小）

岡山	富倉	太田	外様	瑞穂	柳原	常盤	木島	飯山	秋津
----	----	----	----	----	----	----	----	----	----

人口減少率（大一小）

岡 山	柳原（富倉を含む）	外 様	太 田	瑞 穂	秋 津	常 盤	木 島	飯 山
(36.0)	(33.9)	(29.7)	(28.8)	(28.0)	(25.7)	(22.4)	(14.6)	(7.2)

水田率（大一小）

岡山	太田	富倉	外様	柳原	瑞穂	木島	秋津	常盤	飯山
(75)	(71)	(69)	(67)	(62)	(61)	(59)	(56)	(50)	(44)

果樹園率（小一大）

富倉	岡山	太田	瑞穂	柳原	外様	常盤	秋津	木島	飯山
(6.0)	(0.1)	(0.2)	(1.3)	(2.4)	(3.6)	(5.9)	(7.8)	(12.9)	(14.5)

桑園率（小一大）

富倉	岡山	木島	柳原	太田	常盤	飯山	外様	秋津	瑞穂
(0.0)	(0.4)	(0.6)	(1.0)	(1.1)	(1.1)	(1.4)	(1.5)	(1.6)	(3.1)

7. 本市の農業の将来像としては、米の減反政策も進められてもいる折、水稻単作のみに頼って
いては見通しは明るくない。えのき茸などの菌茸類や、雪を利用する花の栽培などに力を入れ、
冬期間の労働力の流出を防ぐとともに、新しい型の農業へ脱皮を図ることが今後の課題である
う。

茅ヶ丘南麓における地理学的考察

大 柿 恵 子

調査地は山梨県の北西部、釜無川以東の火山裾野、及び沖積地である。行政的には韭崎市の東半、穂坂町、藤井町に相当する。

第Ⅰ章では気候・地形・地質・土壌・水系ら、本地域の背景としての自然環境に目を向け、第Ⅱ章では、そこに立脚する農業を、農家人口・農家戸数・就業形態・労働力らの観点から分析し、又土地利用の変遷をたどった。それらから、地形面と土地利用、土地利用上の特色を考えた。他に、主要作物の栽培状況も概観した。

第Ⅲ章では農林業センサスの統計を用い、兼業形態及び土地利用形態から集落の類型化を試み、各集落類型の分布及び類型間の相違を示した。

以上を要約すると次のとおりである。